

金相寺 寺報

遇

～ぐう～

Encounter magazine "Guu"



親鸞聖人御入滅の地・善法院跡

3月

March 2017

No. 12

かみこ くじゅうねん
紙衣の九十年

親鸞聖人はおよそ八百年ほど前、京都に誕生され、九十歳でお亡くなりになりました。

その人生を通してお伝え下さったお念仏の教えは今もなお、人々の心に響き、生きる勇気と力を与え続けています。悪人正機説や肉食妻帯されたということで有名ですが、一体親鸞聖人とはどのような方だったのでしょうか。

ここでは親鸞聖人のご人生について共に触れていきたいと思えます。



● 御入滅

親鸞聖人の最晩年、八十四歳の時、善鸞さまを義絶するという悲しい事件がおきたのですが、この頃、少なくとも、奥さまの恵信尼さまは、聖人の身の回りのお世話を末娘の覚信尼さまに託されて、生まれ故郷の越後米増に帰っておられたようです。これは、三善家から相続した土地や財産の管理をしながら、子どもや親に先立たれた孫たちの生活の面倒をみるためであったといわれています。しかし、恵信尼さまのお手紙でしばしば知られるように、越後での恵信尼さまの生活は、多くの家族と七、八人の傭人を抱え、しかも凶作によって作物を損じたり災害で土地を失うなど、物が不足したりして、老いの身には重すぎるほどのめまぐるしい労苦の日々であったようです。そしてまた、如何なる事情であったにせよ、敬愛してやまない聖人と遙に隔てて暮らさなければならなかった、

辛く淋しい心情は察するに余りあるものがあります。そして、年老いた恵信尼さまは、聖人のご臨終に立ち会うこともできず、ついに京都へ帰られる機会もありませんでした。恵信尼さまが越後へ降られてから七、八年の間、親鸞聖人もまた、善鸞さまの背信、それによって動揺する関東の教団への対応、そして追い討ちをかけるような鎌倉幕府の弾圧への対処と、休む間もなく起こる事件に全身全霊を傾けておられました。

そして、一二六二（弘長二）年十一月二十八日（新暦一月十六日）、親鸞聖人は、その命を仏道に捧げつきました。九十年の生涯を閉じられました。ご臨終は実弟の尋有僧都じんゆうそうずの善法院であったといわれています（諸説あり）。枕辺には実子である末娘の覚信尼さまをはじめ、越後から上京した益方の入道が。門弟では高田の顕智房や遠江池田の専信房などが集まっておられたと伝えられています。



【梵鐘】

「修正会法要の莊嚴を調え、新年を迎える一通りの準備が済んで一段落したところで、自室に入つてこの一年の我が身を顧みる」。愚生はこの様な大晦日の過ごし方を此処何拾年と送つてきた。昨年の大晦日も同様に、新年を迎える準備を為し了え、自室に入つて心静かに辱かたじけなくも与えられし此の一年の「いのち」をどの様に生きてきたかを省みるとき、開教四十年足らずの歴史も伝統もない小院なれど、まがりなりにも住職の任にある身なれば、有縁の方々には佛法を伝えねばならない、しかしながら一句の法文さえも伝えることのできぬもどかしさ、毎年懺悔しながらも「呉下の阿蒙」と云うか、空過の一年と涙するばかりである。

昨年の大晦日、夜も更けて、間もなく年も明けようとしていた折、愚生は本堂のご本尊に御恩徳とともに懺悔の礼拝をし、その後境内に出て祖師聖人の御像に向かつて礼拝せんとしたとき、何処かの寺の鐘の音が、近隣のお寺に違いはないが、「ゴーン」と梵鐘の音が聞こえてきた。当地に来て四十年程になるが、今迄鐘の音に気付かなかつたと云うことは、鐘の音はとどいていたが、愚生が聞き流していたに違いない。しかし、昨年の大晦日の晩、祖師聖人の御像の下で愚生の耳にとどいた鐘の音は、大きな響きとなって愚生の心を振るわせた。

今迄、旅先で多くのお寺の梵鐘を自らも撞き、またその音を聞いてきたが、特別な思いを懐くことはなかった。しかし、先年大晦日の夜更けに何処からともなく聞こえてきた鐘の音は、平家物語の冒頭にある「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の

理を顕わす。驕れる者も久しからず、ただ春の夜の夢の如し。たけき者もつひにはほろびぬ、ひとへに風のまへのちりに同じ」、この名文の如き説法となつて愚生の身に響いたのである。人間世界は、狭くは家庭内の喧み合いから、大きくは国と国との戦争、また異民族への、異教徒への差別迫害と云つた人類特有の醜い姿は尽きることがない。



現在の祇園精舎

仏教の根本思想である「諸行無常諸法無我」の教えが多くの人の中に

とどいたならば、それぞれに汚れているであろう多くの川が大海に流れ込み、一味の潮となる如く、どれだけ安らかで平穏な社会が実現するのではないかと思われてならない。

寺の鐘の音が仏の説法の如く有難く感得されたのは今回が初めてのことと云っていいのだが、今までは鐘の音は近くで聞いても遠くで聞いてもいい音だなどは感じていたが、うるさいと感じたことなど一度もないが、近年は梵鐘の音を騒音と捉える人が増えていて、全国で鐘の音がうるさいとの苦情に対抗しきれず、折角梵鐘が鐘楼堂に吊るされてあつても、撞くことができない寺が出てきていると聞く。

仏教に「六窓一猿ろくそういちえん」と云う教えがある。六つの窓から一匹の猿が覗いているとの譬えである。「六窓」とは「眼耳鼻舌身意」の六根、この六根を通して一匹の猿が外界を覗き見ている。この猿とは人間の心、同じ現象を見ていても同じ音声を聞いてい

ても、各人、心根が違うため、十色に見聞する。梵鐘の音を騒音として拒否される人は、勝敗損得勘定のみに関心を持っているのではと見るは僻目とみであろうか。しかしながら、近年頼とみに鐘の音を拒否する傾向の最大の要因は「坊主憎けりや袈裟まで」

の類で、近時僧侶の不見識な言行が目に残り、人々の心に嫌悪感を懐かしめ、それが袈裟ならぬ梵鐘の音にも向かわしめているのではと思えてならぬ。故に愚生も常に自戒するところであるのだが、思い出されるのは、二十年程前、裏の墓地開設に関して、地元自治会との話し合いで自治会から提出された諸条件の中に「金相寺は今後とも鐘楼堂を設けないこと」と云う条件があったのである。これは鐘楼堂に吊るされる梵鐘の音を嫌つてのことと理解したので、寺としては「鐘楼堂は寺の象徴的な建造物であることを考える時、将来に渡つて鐘楼堂を建立しないと約束することは寺への背信行為に当たり、

鐘楼堂を建立しない旨の約束はできない。然し乍ながら、梵鐘の音が耳障りであると云うことならば、若し将来金相寺に梵鐘が設けられた時は、特定の法要時以外は梵鐘を撞かないと云った話し合いをすることは吝かではない」と云った趣旨の返答をしたことを思い出す。今思うと自治会のこの様な要求も、住職の任にある愚生への反感から生じたものであったのではないかと思われてならない。日々慚愧して止まぬところである。



京都真宗大谷派
真宗本廟(東本願寺)の鐘楼堂

先年或る学僧から梵鐘の音にかかわる興味ある話を聞いた。それは「関西の或る名刹では、寺の隣に病院を

併設しており多くの患者が入院している。同じ病棟の一号室二号室と隣り合わせに同じ病気病状の患者がいて、毎朝六時に聞こえてくる隣の寺の鐘の音に対して、朝の回診の折、一号室の患者は看護師に「身心共に辛い思いで入院しているのに毎朝寺の鐘の音が響いてきて、いよいよ辛くなる。どうにかならないか」と訴える。ところが二号室の患者は同じ看護師に「身は大儀だけでも、梵鐘の音が聞こえてくると心洒あられる心地がして安らぎます。鐘の音は有難いですね」と云いながら微笑む。梵鐘の音に対して対照的な二人の患者の受取方に疑問を懐いた看護師は、その後二人の患者から詳しく聞いて分かったことは、愚痴を訴えた患者さんは普段全く宗教には無縁の生活をしていて、寺にも特別興味ないということ。又一方の鐘の音は有難いですねと合掌されていた患者さんは、常日頃よくお寺へお参りされていた

前者は出航を知らせるドラの音の如く鐘の音もただの騒音と捉え心辛立たせるのである。又後者は梵鐘の音をみ仏の説法の如く聞き取り、「無常なればこそ病気にもなる。縁にまかせて療養させてもらおうとの受け止め方で、身心共に安らいでいかれる」との話を戴いた。

一般に梵鐘と聞いて思い浮かぶのは、大晦日の「除夜の鐘」であろう。よく除夜の鐘は百人の煩惱を除くとも聞く。山梨の或る寺では神社が隣りにあり、大晦日の夜年明け近くにすると近隣の人たちが、まず寺へ参って鐘を撞き煩惱を払い除き、その脚で年明けと同時に今度は隣の神社へ参って新年の家内安全、商売繁盛、無病息災、学業成就と云った願掛けをするとのこと。愚生には梵鐘を撞いて煩惱を洒い清めた傍から、また煩惱塗れになると云った行為に思われ、大きな矛盾を感じてならないのだが。

昨年の大晦日の晩、親鸞聖人の御

像の下で聞こえた梵鐘の音が、祖師聖人の呼び声の如く有難く心に受け止めながらも、右に書き記した事柄を考えさせられた「鐘の音」であった

成田 宣信（金相寺住職）
合掌



御同朋の声

【金相寺さんとの「縁」】

金相寺門徒総代

湯谷 秀康 氏

私と金相寺さんとの縁は、父が亡くなった昭和六十三年からです。父は無宗教で、それまで家には仏壇も神棚もありませんでした。亡くなった時、私は何もわからないので、病院で紹介された葬儀社さんに、お寺の由来や仏具屋探しなど、すべてにわたって相談にのっていただき、教えてもらいました。富山県にある我が家の本家が浄土真宗のお寺の檀家ということで紹介されたのが金相寺さんでした。

それまでの私は、若い時から宗教に特別な関心があったわけではあり

ませんでした。お寺の庭を観ながら抹茶をいただく時が、心が落ち着いて好きでした。特に好きだった京都を中心に日本中を旅して、奈良の新薬師寺、岩手県平泉の、今では世界遺産に登録されている毛越寺に泊めて頂いたこともあります。四十歳を過ぎてから、富山県八尾町で毎年行われているお祭り、「おわら風の盆」が好きになり、聞名寺の本堂で奉納されるおわらを毎年観に通っていました。

また、仕事でカトリック系の学校でテニスの講師をしていた関係で、毎年入学式、卒業式、クリスマス会の前ミサに出席していました。いずれもご住職や神父さまのお話を拝聴することは興味深く、新鮮でした。金相寺さんにお参りさせていただくようになってからは、その度にご住職にわからないことを教えていたり、いろいろなお話を聞くことが出来ました。ただ、お経に興味はありましたが、お経の言葉は同じ日本語でありながら現代用語とは意味

が異なる場合が多く、難しくよくわかりませんでした。



お葬式勉強会の様子

昨年からは、仕事を退職したこともあり、勉強会に誘っていただき参加させていただいています。「正信偈勉強会」や「歎異抄勉強会」以外にも、お葬式勉強会やマイウェイセミナー（エンディングノート講座）といった現実的なテーマの勉強会もあり、いろいろ詳しく教えていただき、とても役立っています。これから勉強会を通して、知らないことを学んでいきたいと思えます。



どうぼうかい

同朋会

く歎異抄勉強会く

【現代語訳】

《第一条》

人間の思慮しりょを超えた阿弥陀の本願の大きいなるはたらきにまると救われて、新しい生活を獲得できると自覚して、本願に従おうというところが沸き起こるとき、迷い多きこの身のままに、阿弥陀の無限なる慈悲に包まれて、不動の精神的大地が与えられるのである。阿弥陀の本願は、人間のいかなる条件によっても分け隔へだてや選えらびをしない。ただ、如来の本願に目覚めるころひとつが肝心なのである。なぜなら、生活状況に振り回されて、欲から抜け出せずに悩み苦しんでいる私たちをこそ救おうとする願いだからである。

(後略)

私たちが「信」や「信心」という言葉を使う場面を考えてみると、「ひとを信じる」とか、「御利益が与えられると信じる」と用います。辞書にも「信じる」の意味として「思い込むこと。固く信じて疑わないこと。是非そうしようと固く決心する」などの意味が出ています。しかし『歎異抄』の語る「信心」は、そういう意味とはまったく違います。一般的な意味の「信心」とは、「自分が信じる信心」です。『歎異抄』のいう「信心」は、「自分が信じられていると受け取ること」です。ですから、「信じる」の主語が違います。「自分が何かを信じる」のではなく、阿弥陀如来に自分がまると信じられていると受け取ることです。私は主語ではなく、むしろ客体です。

(『なぜ？からはじまる歎異抄』

本文より抜粋)

く所感く

親鸞聖人の他力本願のみ教えを学ばせていただくなかで、一番の問題となるのが、やはりこの「信心」の問題ではないでしょうか。

私たちは日頃、「信じる」という言葉をよく口にしますが、私たちの「信」ほど信用できないものはありません。むしろ「信じている」といつているときこそ疑いのところが強いときではないでしょうか。そもそも私たちにおいて本当に「信じる」ということは成り立たないのです。

そうではなくて、阿弥陀如来のほうか、どのような私であつても、「必ず救い遂げるべきもの」であると、この身を信じて、はたらきかけ続けてくださっているのだというのです。その阿弥陀如来から信じられているということを受け取るところに苦悩のなかで安心して立っていける大地が私たちに与えられるのではないのでしょうか。

知って得する！

焼香の作法！

焼香とは仏式のお通夜、お葬式等で故人（仏様）に対しお香を焚いて拝むことを言います。そろそろお彼岸の時期ですし、皆さまも年に数回は焼香をする機会があるかと思いますが、作法と言われると…?! 今回は、いざという時の焼香の作法についてご伝授致します。

セシモニー真富
が教える



金相寺世話人
山崎富美雄氏

基本的な焼香の作法！

焼香を毎日する方は、然程多くありません。仏事では意外と、先にする方の真似をしながら、ぎこちなく焼香される方も多いのではないのでしょうか？

□まずは基本的な焼香の作法を！

右手の親指・人差し指・中指の三指で抹香（粉末にした櫛の葉等で作成した香）を少しつまみ、額の高さまで持ち上げます。（額にいただく、または押しいただくと言います）

次に、炭の入った香炉へ、指をこすりながら落とします。数珠は左手に掛けておくのが正式です。

□焼香の流れ？

焼香のスタイルは一般的に三つあります。立って行う「立礼」、座って行う「座礼」、そして、座って香炉を手元に置き、順次隣の人へ回す「廻し焼香」です。

金相寺さんの合同法要では、「廻し焼香」を行っていますよね？早速試してみましよう。

一、椅子に座られている方は、焼香炉が回ってきたら膝の上のせ、仏様に向かい合掌します。

二、膝の上で焼香（真宗大谷派（東本願寺）の場合は、額にいただくことはせずに、二回香炉へ落とします）をし、合掌します。

三、焼香炉を隣の方へお渡しください。正座で受けられた方は膝前に置いてご焼香ください。

宗派で異なる焼香の回数？

実は焼香の回数は、宗派によって異なります（大谷派は右記のとおりです）。しかしながら、参列したお葬式の宗派まではなかなか判りかねます。そんな時は故人様に対してお気持ちを込めてしつかりと一回行いましょう。また、会葬者の多いお通夜やお葬式ではあらかじめ宗派に関わらず、丁寧に一回の焼香で行うのがマナーです。（葬祭場の方より指示がある時はその指示に従いましょう）
焼香前後のご遺族への一礼（会釈程度）も素敵なマナーですね！

副住職の 日々の出遇い



● 青年会・子ども会合同開催 報恩講のご報告

昨年十一月二十日、創志館く相模原てらこや共催で青年会・子ども会合同の報恩講をお勤めしました。



もうお勤めも慣れたもの。大きな声で丁寧にお勤めできました。



今年のお話は「いのちの重さ」についてでした。てらこやメンバーが子どもたちにわかりやすく伝えたいと、寸劇で『シビ王物語』を演じてくれました♪



今年はおやつのわた菓子まで！



お勤め・お話のあとは恒例の食事タイム♪境内でけんちん汁と焼き餅を食べました。

次回の子ども会は三月二十七日に「花まつり」の開催を予定しています。是非有縁の方々お誘いあわせの上、お気軽にご参加下さい。



今後の予定

法要

三月二十日 春彼岸会
七月十六日 孟蘭盆会
九月二十三日 秋彼岸会
十一月十二日 報恩講

勉強会など

三月二十七日 午前十時～
子ども会花まつり

※詳細はホームページをご覧ください

四月八日 午後二時～

同朋会（歎異抄を学ぶ会）

※以後、偶数月（六・八・十・十二月）の

第一土曜日に開催予定

毎月一回 仏教青年会

※毎月の開催日等、詳細はホームページを

ご確認ください。電話・メールにてお問

合せ下さい

予定は都合により変更する場合がございます。詳細は随時ホームページをご確認いただくか、電話・メールにてお問合せ下さい

編集者雑感

昨年からの地域のなかで子どもたちや青少年の居場所を創りたいという願いのもと、「創志館」相模原で「こやく」という団体を地域の有志の方々と立ち上げました。そこには近隣の大学生の方々にも関わっていただいているのですが、彼らと話していると、年齢が倍ほども違うので当然といえば当然なのですが、世代間ギャップというものを非常に感じます。一方で、同じように私が彼らからいふ年齢の頃に、「今の私と同じくらいの年代の方々から「昔はこうだった」と言われていた事を思い出します。

てらこやでは世代間交流の場を創造することも大切な願いとしていますが、得てして世代間交流の場では、歳を重ねたものは「最近の若者は」と言い、若い世代のものは「考えが古い」と切り捨ててしまいます。大切なことは、違いを違いとして認め、それをお互いにならぬよう理解し、尊重できるかなのだと学生さんたちとの交流を通して教えていただいています。

合掌

『こやく』第十二号

発行 浄土真宗 霊苔山 金相寺

副住職 成田 宣明

〒252-0328

神奈川県相模原市南区麻溝台726-1

Tel 042-778-2879 Fax 042-771-8257

e-mail info@konsouji.com

URL <http://www.konsouji.com>

発行日 二〇一七年三月一日